

日本学術会議 基礎医学委員会 神経科学分科会（第 26 期・第 2 回）

議事録

開催日時： 2024 年 7 月 25 日（木）13 時 15 分—15 時 00 分

開催場所： 福岡国際会議場 4 階会議室 401 および Zoom

出席者（敬称略・順不同）： 池田和隆、伊佐正、入来篤史、榎本和生、大木研一、大隅典子、岡部繁男、岡本仁、上口裕之、上川内あづさ、菊水健史、久保郁、後藤由季子、坂内博子、平田たつみ、藤山文乃、宮川剛、吉村由美子、渡辺雅彦、柚崎通介

欠席者： 今水寛、河崎洋志、銅谷賢治

懇談事項：

1. 脳研究倫理の見解（第 25 期）について

現在は親委員会（基礎医学・臨床医学）と第二部役員の確認中であり、2024 年度内に表出することを目標とする。

2. 研究力強化についての提言について

2026 年から開始される第 7 期計画科学技術・イノベーション基本計画策定に向けて、日本学術会議の科学者委員会・研究体制分科会が今年内に提言を行う予定。そこで 9 月を目標に、以下の（１）～（４）の観点から神経科学コミュニティの意見をとりまとめ、研究体制分科会に働きかけたい。基本的には「当日資料 5」に沿って進める（ランチョン大討論会 2024 でも議論する）が、本分科会で議論された要点は以下の通り。

（１）研究関係者のキャリアパスを長期的に俯瞰できるものに！

ラボ主宰以外の多様なトラックを用意し、適材適所の流動性と安定性を確保したい。博士号取得者が広く社会に受容されるための各種基盤（政府関連部署、企業など）を整備できるよう働きかける。人材派遣方式など各論的な制度に踏み込むのは難しいが、本分科会としては上記の原則を提示して、研究関係者キャリアパスの改善に取り組む方針とする。

（２）安定した基盤的研究費の充実を！

研究費増額の要望は、国からの他の支出とのバランスで検討する必要あり（科学者

は国全体からするとマイノリティ)。選択と集中のバランス並びに性別、年齢、地域等種々のダイバーシティを考慮した資源配分を重視する姿勢を示すべき。科研費と運営費交付金等は両輪であり、両者のバランスは重要。トップダウン研究費とボトムアップ研究費の比率の最適化も重要。大学等の基盤的な運営に必要な経費（間接経費も含む）に関する要望の出し方については、引き続き検討していく。科学者の立場としては研究費の年度繰り越しの容易化は望ましい。国の年度会計との関係で難しいが、国の支出総額には影響しないので、積極的に要望したい。

（３）分野横断的な対話・議論ができる場を！

「国の政策に活かしていくための双方向コミュニケーションの場」に取り入れる意見については、年齢以外のダイバーシティも考慮すべき。新たな研究分野の立ち上げにあたっては、その評価体制（評価軸と評価者）を整備・育成しておくべき。新分野の創出は既存分野のリソースを削ることになるため、両者のコンフリクトを考慮する必要あり。

（４）社会との対話の活性化を！

早めの対話が重要。小中学生など低年齢層へのアウトリーチも拡充して、将来の脳科学ファンの育成を目指したい。各学協会や NPO 法人「脳の世紀推進会議」等とも共同する。政治家・官僚へのアドボカシーも重要。

3. グランドビジョンの update について

「糖鎖分野」は生命科学分野として初めて学術フロンティア事業に採択された。AI とリンクした脳科学で学術フロンティア事業を提案する可能性も考えられる。今期は拙速な提案は行わないが、神経科学分科会として長期的な議論を続ける。